

【論文】

辰野金吾設計「安川邸西洋館」案の室内装飾における対称性と構成要素

SYMMETRY AND ELEMENTS IN THE INTERIOR DECORATION OF KINGO TATSUNO'S "YASUKAWA RESIDENCE WESTERN WING" PROJECT

有水 玲香*¹, 富田英夫*²
Reika ARIMIZU, Hideo TOMITA

Abstract : This study clarifies the symmetry and elements in the interior decoration of the "Yasukawa Residence Western Wing" project designed by Kingo Tatsuno, finding that 2-1 revealed the number of wall surfaces with an axis of symmetry, and 2-2 revealed the following three aspects of the elements. (1) A comparison of double swinging and single swinging doors showed that the former was connected to the room used for serving guests. (2) Rooms serving guests had a high proportion of symmetrical axes. (3) The door decorations reinforced the symmetrical design of the walls.

Keywords : *Kingo Tatsuno, Western Style-House, Interior Decoration*

辰野金吾, 西洋館, 室内装飾

1. 序

1-1. 研究の背景

辰野金吾 (1854—1919) は「東京駅」(1914) を初め様々な公共建築の設計に関わっているが、個人の邸宅の設計に関わった例は僅かしかない。竣工した事例だと「渋沢栄一邸」(1888)、「辰野金吾自邸」(1911)、「松本健次郎邸」(1912)などが挙げられる。そのうち、「松本健次郎邸」の施主である松本健次郎は、「安川邸西洋館」案の施主である安川敬一郎の子である。実現している「松本健次郎邸」とは異なり「安川邸西洋館」案は実現には至っていないものの、辰野は親子二代の西洋館設計に携わった。ただし「安川邸西洋館」案は辰野葛西事務所が設計し、「松本健次郎邸」は辰野片岡事務所が設計した。安川邸当初の西洋館計画(1889年から1907年頃)は、安川敬一郎の意向により実現されなかったことから幻の安川邸と呼ばれている。

1-2. 既往研究

藤森 (2017) は「松本健次郎邸」と「安川邸西洋館」案の設計は同時に行われ、規模は「安川邸西洋館」案の方がはるかに大きかったと指摘している。内田 (1990)、足立 (1998) は「安川邸西洋館」案のインテリアにおけるアー

ル・ヌーヴォーの造形を指摘している。一方外観については、前述の内田、足立が辰野の外観のハーフティンバーに日本的な意味を見出した指摘に留まっている。

また、河上ら (2014) は、辰野の建築において外観におけるピクチャレスクの表現について言及し、井口ら (2016) は辰野が影響を受けたウィリアム・バージェスの作品との構成方法の類似性を指摘している。このように外観における辰野の独特の表現については研究が多いものの、インテリアについては前述のように、アール・ヌーヴォー的な造形の指摘にとどまっている。

1-3. 研究の目的と方法

そこで本研究では、「安川邸西洋館」案において室内装飾がどのような意味を持つのか、室内装飾から見た部屋同士の関係性、構成要素の装飾性の意図を明らかにすることを目的とする。

研究方法として、2章1節では各部屋詳細図、平面図、天井伏図を基に展開図を作成し、「安川邸西洋館」案を室内装飾における対称軸と構成要素(両開き扉、片開き扉、暖炉、窓、壁)を分析する。2章2節では展開図と各部屋詳細図より扉の装飾性について分析する。

1-4. 研究資料

研究には『建築工芸叢誌』(1912年2月～9月)に5回に分けて総計23ページにわたり掲載された安川邸西洋館

*1 工学研究科産業技術デザイン専攻建築デザイン分野

*2 建築都市工学部建築学科

建築工事の図面を使用する。

1-5. 分析対象

各部屋詳細図に掲載されている各部屋の壁面は、部屋によって資料状況に大きな差が見られる。分析は壁面の資料が揃っている、または壁面の資料に不足があるが不足分は左右対称等の理由で省略されていると考えられ推定復元が行える部屋を対象とした。その条件を満たしたのは、玄関、応接室、広間、表階段室、食事室、裏階段室、一階書斎、一階書斎付属室、張出廊下、二階書斎、二階書斎付属室の11室である。

2. 図面における室内装飾の対称軸

2-1. 対称軸を有する壁面の数の分析

図1は詳細図より作成した玄関の展開図となる。図中(α)(β)のように床レベルに高低差があると考えられる場所は床面のレベル差によって壁面を分け、玄関の壁面を(a)～(f)の6面の壁面に分けた。

図1中赤い線が壁面の対称軸の中心を示す。この対称軸を中心に壁面のデザインが左右対称である状態を対称軸があるとし、赤い線を引いている。左右対称では無い場合

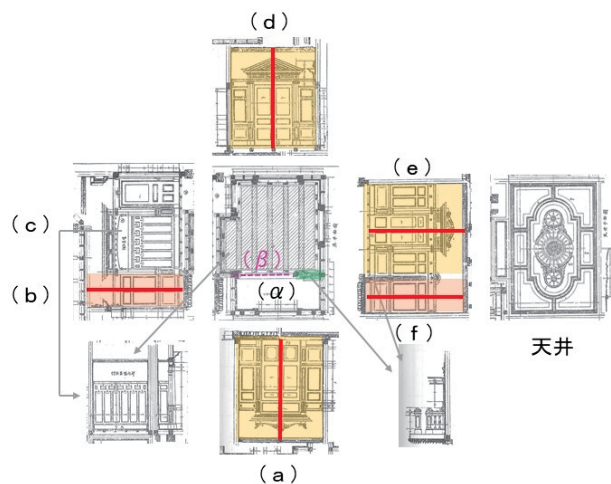


図1 玄関（展開図）（着色・加筆・レイアウトは著者による）

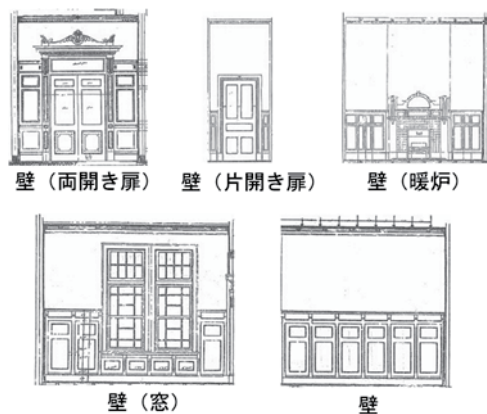


図2 2章における分析対象となった構成要素

は対称軸が無い場合として、図1には記載をしていない。図1と同じ手順で研究対象である11室の対称軸の有無、数をまとめた結果を表1とした。

表1 対称軸を有する壁面の数（左の数が対称軸のある壁の数）

壁面の分類 部屋名	壁 (両開き扉)	壁 (片開き扉)	壁 (暖炉)	壁 (窓)	壁
玄関	3/3	0/1			2/2
応接室	0/1	1/1	0/1	1/1	1/1
広間	3/3	4/4	1/1	4/4	2/2
表階段室	1/1	0/1		3/3	0/1
食事室	2/2	0/1	1/1		2/2
裏階段室		0/1		0/1	0/2
一階書斎	1/1	0/1	0/1	0/2	3/3
一階書斎 付属室		0/1		1/1	2/2
張出廊下	1/1	1/1		2/4	4/4
二階書斎	1/1	0/1	0/1	0/2	3/3
二階書斎 付属室		0/1		1/1	2/2
計	12/13 (92%)	6/14 (43%)	2/5 (40%)	12/19 (63%)	21/24 (88%)

表1中の「壁（両開き扉）」は、両開き扉のある壁面を指し、同じように「壁（片開き扉）」は片開き扉のある壁面、「壁（暖炉）」は暖炉のある壁面、「壁」は扉や窓のような構成要素（図2）の無い壁面を指す。

表1より「壁（両開き扉）」「壁」「壁（窓）」「壁（片開き扉）」「壁（暖炉）」の順で対称軸の割合が高いことが分かる。外観デザイン、機能上の制約や配管上の制約などを考慮すると「壁（窓）」「壁（暖炉）」の室内装飾における対称軸は他の3項目と比べ少なくなることは順当である。一方で構成要素の存在しない「壁」に関してはその反対で、機能上の制約や配管上の制約などを考慮する必要が無い為に、デザインにおける対称性の割合が高くなったのではないかと推測した。

しかし「安川邸西洋館」案の中央に位置する広間を見ると、窓や暖炉の項目も含め全ての項目で対称軸が存在することから、デザインにおける対称性が優先される場合もあることが分かる。

2-2. 構成要素の分析

(1) 対称軸と両開き扉、片開き扉

「安川邸西洋館」案内部の扉には両開き扉と片開き扉が存在する。研究対象に選んだ11室の中には同じ部屋の中に両開き扉と片開き扉の両方が存在する部屋も多くある。両開き扉、片開き扉の構成上の違いを分析するため表2を作成した。

表2より両開き扉が繋がる空間は広間や表階段室など名前の付いた部屋なのに対し、片開き扉は廊下に繋がるものが多く見られる。

図1の玄関においては、合計4枚の扉があり、その内

(a) (d) (e) の壁面にある 3 枚の扉が両開き扉で、それぞれ車寄、広間、応接室へと繋がっている。一方で (c) の壁面にある残り 1 枚の扉は片開き扉であり、廊下へと繋がっている。

このように「安川邸西洋館」案の室内装飾において、接客にも供すると推測される部屋（玄関、応接室、広間、表階段室、食事室、張出廊下）に繋がる扉は両開き扉であり、また両開き扉に関しては、扉の対称軸と壁面の対称軸が一致するといった特徴が見られる。

このことから以後、両開き扉に関して注目して分析を進めた。

表 2 各扉と接して配置される部屋

部屋名	壁 両開き扉	接する 部屋名	壁 片開き扉	接する 部屋名
玄関	3/3	車寄、広間、応接室	0/1	廊下
応接室	0/1	玄関	1/1	廊下
広間	3/3	玄関、食事室、表階段室	4/4	廊下
表階段室	1/1	広間、張出廊下	0/1	廊下
食事室	2/2	広間、屋外	0/1	廊下
裏階段室			0/1	物置
一階書斎	1/1	廊下	0/1	付属室
一階書斎 付属室			0/1	書斎
張出廊下	1/1	表階段室	1/1	像備室
二階書斎	1/1	廊下	0/1	付属室
二階書斎 付属室			0/1	書斎
計	12/13		6/14	

(2) 壁面の対称軸と両開き扉の中心軸の一致・不一致

表 1 における壁面の分類中の「壁（両開き扉）」の項目より、後述する一箇所を除き、それ以外の 12 箇所すべての両開き扉はその中心軸と壁面の対称軸が一致していることが分かる。

一方で、扉の中央に対称軸が存在しない両開き扉が、応接室に存在する（図 3）。この扉は隣に位置する「玄関」と「応接室」を繋ぐ両開き扉となっている。この扉を「玄関」側から見た図は図 1 (e) となり、壁面の中央に位置する両開き扉となる。しかし同じ扉を「応接室」側から見ると図 3 (a) となり、壁面の中で右寄りになっており、壁面の中央と両開き扉の中央が一致しない。これは「玄関」側の扉の位置が優先された結果、「応接室」側の扉の位置が壁面の中心からずれ、対称軸が存在しないという結果になったのではないかと考えられる。

これらの結果より、部屋全体の壁面において対称軸の割合が高くなる部屋が「安川邸西洋館」案において比較的重要視される部屋としてデザインされているのではないかと考えられる。

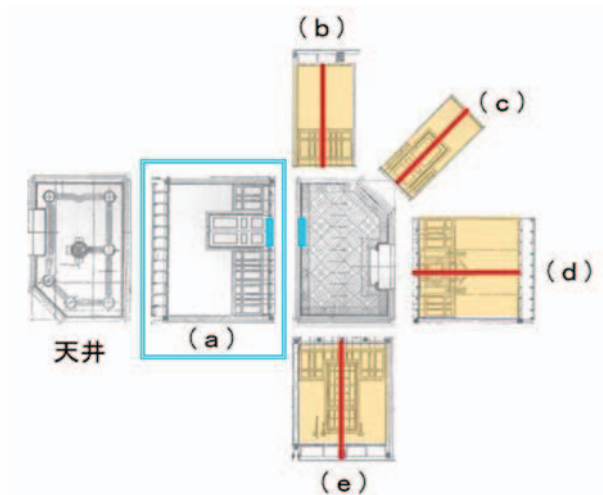


図 3 扉の中央に対称軸が存在しない両開き扉（応接室）
（着色・加筆・レイアウトは著者による）

(3) 両開き扉の装飾

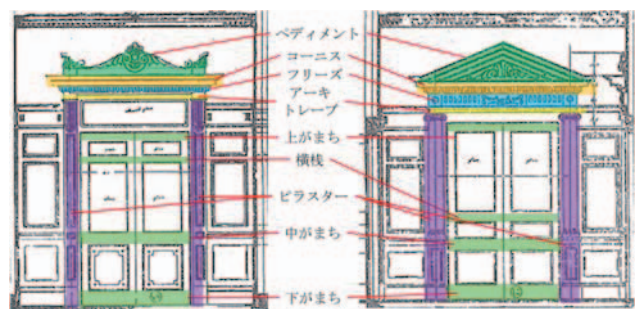


図 4 玄関の両開き扉（左：車寄側、右：広間側）
（着色・加筆は著者による）

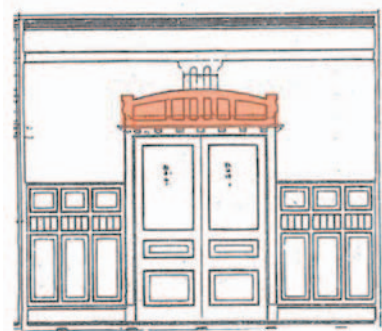


図 5 食事室の両開き扉（広間側）（着色は著者による）

図 4・図 5 のように、両開き扉には装飾が見られる。これらの装飾はどの扉においても左右対称なデザインになっており、これらの装飾が存在することによって壁面の左右対称性が強調されている。

図 4 は玄関の扉で、「安川邸西洋館」案の扉の中でも装飾性が強いものとなる。古典主義建築のオーダーのシステ

ムによる構成要素が見られる。図5は食事室の扉であり、こちらは扉の装飾自体はあるものの、玄関とは異なったアール・ヌーヴォー的な曲線を用いた要素が見られる。このように両開き扉の装飾には様式的な統一はないものの左右対称なデザインであることは共通している。

3. 結



図6 対称軸を有する壁面の割合が高い部屋の配置
一階平面図(上)、二階平面図(下)
(着色・加筆は著者による)

以上の分析より「安川邸西洋館」案では接客にも供する部屋にはより多くの壁面において対称性が見られることが明らかになった。また、隣り合った2つの部屋のうち、片方の部屋の対称性を優先した結果もう片方の部屋の対称性が損なわれる場合がある。

これらの壁面の対称軸の割合を基にして、「安川邸西洋館」案における分析対象11室を壁面の対称軸の割合が高い順に並べた結果が表3である。そして、表3で示した割合を4段階に色分けして平面図で表すと図6のようにな

った。

図6より対称軸の割合が高い部屋は「安川邸西洋館」案の中でも中央部に集まっていることが分かる。また、接客空間としても使われるパブリックな用途の部屋が上位に見られる。

「安川邸西洋館」案については、図面と同時に文章による仕様書も掲載されていることから、今後は仕様書も分析に加え、より総合的な考察を行う必要がある。

表3 各部屋の対称軸を有する壁面の割合(高い順に表示)

	部屋名	対称軸を有する壁面の割合
1	広間	100%
2	張出廊下	86%
〃	(一階書斎付属室)	86%
〃	(二階)書斎付属室	86%
5	玄関	83%
〃	食事室	83%
7	応接室	80%
8	表階段室	67%
9	(一階)書斎	50%
〃	(二階)書斎	50%
11	裏階段室	0%

表出典

表1～3：参考文献1を基に著者作成。

図版出典

図1、3～6：参考文献1を基に著者が編集。

図2：参考文献1

参考文献

- 『建築工芸叢誌』【復刻版】(1912年2月～9月)、内田青蔵(監修)、柏書房、2006年。
- 内田青蔵「松本健次郎邸と住宅」、所収：『東京駅と辰野金吾 駅舎の成り立ちと東京駅のできるまで』東日本旅客鉄道、1990年、pp.116-119。
- 足立裕司、藤岩和文「旧松本健次郎邸とその建設経緯に関する考察 住友本店臨時建築部と日本のアール・ヌーヴォー 1」『日本建築学会計画系論文集』511号、日本建築学会、1998年9月、pp.193-199。
- 河上眞理、清水重敦『辰野金吾』ミネルヴァ書房、2015年。
- 社団法人西日本工業倶楽部『重要文化財 旧松本家住宅洋館日本館修理工事報告書』、1982年。
- 清水重敦、河上眞理『佐賀偉人伝08 辰野金吾』佐賀県立佐賀城本丸歴史館、2014年。
- 藤森照信『現代日本の洋風建築 栄華編』筑摩書房、2017年。
- 井口博道、富田英夫「辰野金吾設計『安川邸西洋館』案(1908)の形態構成に関する研究」『日本建築学会研究報告九州支部』第55巻、2016年、pp.617-620。